



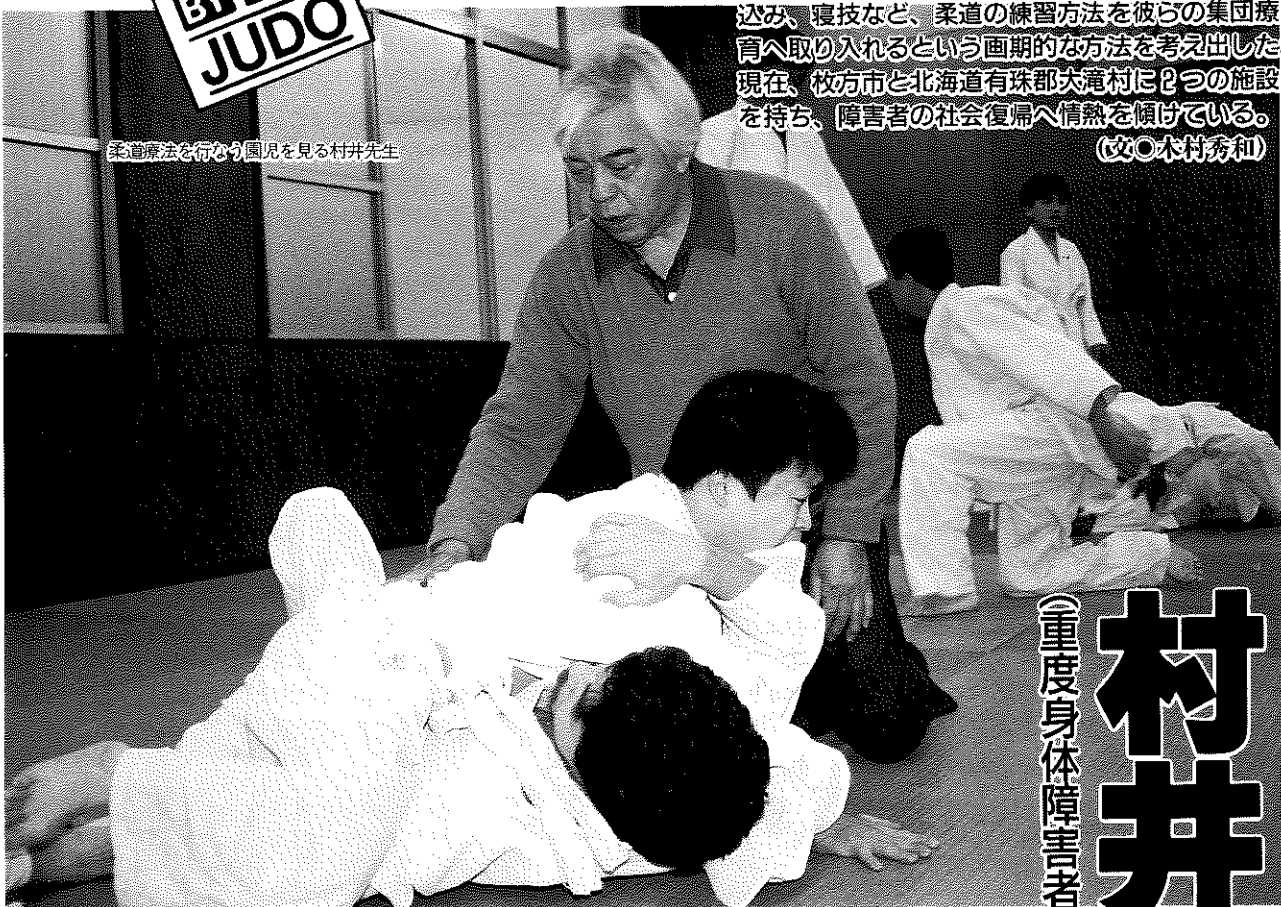
## 連載— ③②

人生の一時期を  
ただひたすら柔道に打ち込んだ、  
そんな人たちの現在の生き方  
そして人生を注目してみたい

柔道を医療に応用し、目ざましい成果をあげている医師がいる。村井正直氏。かつて、学生時代に修業した柔道は、年を経て、立派に社会に役立っている。脳性マヒ等による重度の身体障害を持つ人にとっては、肉体の機能をいかに発達させるかは切実な問題である。村井氏は、受け身、打ち込み、寝技など、柔道の練習方法を彼らの集団療育へ取り入れるという画期的な方法を考え出した。現在、枚方市と北海道有珠郡大滝村に2つの施設を持ち、障害者の社会復帰へ情熱を傾けている。

(文◎木村秀和)

柔道療法を行なう園児を見る村井先生



# 村井 むらい まさなお 正直

（重度身体障害者更生援護施設・わらしべ園創始者）

大阪の枚方市にあるわらしべ園

### 光州東公立中時代に2段を取り、 せっかく入った医専も退学

大阪・枚方市、片町線の長尾駅から1kmぐらいの丘に社会福祉法人・わらしべ園・重度身体障害者更生援護施設がある。脳性マヒや交通事故の後遺症で手足、言語などに障害がある人々を療育し、社会復帰の手助けをする施設である。

その建物の一角に村井医院も併設し、村井医師は外科・内科などの一般外来治療も行なっている。

その村井氏は柔道家の父のもとで、「5歳ぐらい」から柔道を始めた。

父真一氏は8段、香川県を代表する柔道家で、全国的にも名の知られた人だった。「朝鮮の警察で柔道を教えていたんですが、私は女3人男1人のきょうだい。父としても期待し

ていたんでしょう。小さい時から道衣を着せられて……」

そのお陰で、「光州東公立中学3年の時には講道館の2段をもらいました。当時、16、17歳で2段というのは朝鮮の日本人の中でも少数。一応強い方の選手でした」と村井氏。

父仕込みの柔道は、内股、釣り込





園内を見回る。先生と障害者との間に笑顔の交流

み腰、大内、小内刈りなどを得意とする技能派の柔道であった。

この柔道で、のちに名古屋国体の鳥取代表の座を射止めることになる。それも「100kg以上の巨漢を50kgもないガリガリの体でぶん投げた」という痛快な勝負であった。これは後述する。

若き柔道家として順調に伸びつつあった村井氏は、昭和18年に光州医専に入学したが、翌年には軍人になりたくて医専を飛び出し、甲種幹部候補生にくら替え。

### 敗戦で引き揚げ、アルバイトの毎日

ところが、昭和20年、日本が敗戦国となり、軍人への夢は短時間でつぶれてしまった。その年の暮れに日本への引き揚げ。目まぐるしい生活環境の変化を味わった。「父は残務整理があり、朝鮮に残っていたので、一家の主として私は土方をやったり、焼け跡の片づけやったり、結局、23年に鳥取県の米子医専へ編入するまでの間、ずっとアルバイトでした」

この時期を村井氏は「つらかったが、根性は鍛えられた」と振り返る。父も帰国し、昭和23年頃から村井氏はやっと医学生として再スタートすることができたわけだ。

もっとも、学費はアルバイトで稼いだ。苦学生だったのだ。

米子へ行ったのは当時「引き揚げ医学生を受け入れてくれるところが米子医専だったから」

かつての柔道選手としての姿は、

生活のために消滅していた。

復活したのは、昭和25年の名古屋国体の時だ。鳥取県のチーム代表を選ぶ際、たまたま父の柔道の友人が村井氏存在に気づき、「村井のせがれなら、少しはやれるだろう」というので、私を予選に出すよう手続きしてしまった」

「でもねえ、その頃の私は45kgぐらい。大学3年生でしたが、ガリガリのやせっぽち。ところが、予選に出たら、相撲から警察官になった100kg以上の人をなぜか返し技みたいなもので投げちゃった。これでちょっと自信を持った」

国体では副将で出場し、判定負け。しかし、それが契機となり、村井氏は大学に柔道部を創設した。やはり、柔道に飢えていたのだろう。

「部を作ってからは一生涯懸命練習はやりましたね。後輩も入部してきますし……」

鳥取の東西大会で6人ぐらい抜いた経験も今は「懐かしい」と言う。

昭和26年、大学を卒業。大学の解剖学教室に残った。解剖学を専攻したのは「人間が四つ足から2本足になり、進化してきた歴史を人類学史的に勉強するため」だった。

このテーマを追求するためには外科的な視点も必要と感じた村井氏は昭和31年、大阪市立大学の外科へ移った。

ここから、村井氏の人生の一大転換が始まることになる。

「将来は外科病院でも開いて、と思

っていたある日、脳性マヒの重度障害児の相談を受けたことがあったんです。それまでは漫然とした知識だったんですが、障害者の置かれている現実や施策、国や自治体のこの問題への対応など、その遅れは私にとってはショックだった」

外科医としてバリバリやっていた昭和43、44年頃のことで。

### 柔道の療育への応用、ペトーシステムで確信する

これが転機となり、村井氏は当時、重度障害者の療育では世界の5指に入るといわれたイギリスのポーバース研究所へ、昭和45年留学する。

ところが、8ヵ月の勉強は村井氏に十分な満足を与えなかった。

「いろいろあるんですが、療育というのは医者と患者の信頼関係があって成り立つんです。その点、ポーバースの療育は、患者を横たえて、手足を強く抑えたりして患者は苦痛で泣くんですね。これでは果たして信頼関係が生まれるんだろうかと疑問を持ったんです」

この点を考えながら帰国した村井氏は、あるひらめきを覚えた。

柔道療法の際に現場で直接、指示を与える



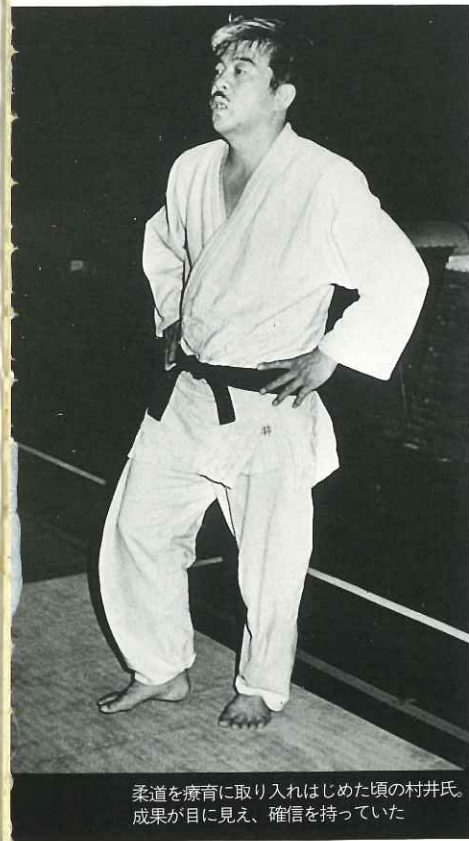
「そうだ、柔道を使って治療できないか……」

そのひらめきは正解だった。「例えば、立てない子は寝技をやらせる。自主的な動きで相手と攻め合い防ぎ合うのですから、抑えつけて泣かせることはないし、袈裟固めで抑えていても、両足を開いて踏んばらなければ、下の者にひっくり返されてしまうでしょう。そこで、抑えている方は足を大きく開く努力をする。これが、両下肢の内転筋の硬直を解き放つ一因になるんです」

脳からの命令が筋肉に届き、筋肉は正常に動くように努力する——脳性マヒの治療としては理にかなったものだったのだ。

柔道の治療への応用は、「柔道は格闘技ですから、相手に負けまいとする意欲をかき立て、そのことが精神的自立、社会的な自立の方向へ向かわせるんです」という大きなメリットもあった。

脳性マヒの障害を持つ人は、発声も障害がある人もいます。この場合でも、掛け声を掛けているうちに健常者に近づいていくという。



柔道を療育に取り入れはじめた頃の村井氏。成果が目に見え、確信を持っていた

受け身を習うことにより、転倒した時のケガも少なくなるし、本能的に体をかばうことで、脳から手足の筋肉への伝達も訓練されるのだ。

この柔道療法を取り入れ、効果をあげ始めた頃、村井氏はハンガリーのペトー集団療育システムを知った。

この療法はひと口に言えば集団でやる療育システムだ。無理やり、マヒした手足を動かすのではなく、自主性を持たせながら競争心や積極性を巧みに引き出し、患者自らの欲求で、自己開発を進めていくものだ。

この療法と村井氏の集団柔道療法はピッタリと一致した。

以後、村井氏は、このペトーシステムを基盤とし、今日まで、何百人もの重度障害者の社会復帰への手助けをしてきている。

### 「税金を払える身分に」と園児を激励し自覚を高める

大阪市立大の外科医だった村井氏は、昭和53年にわらしべ園をオープン、63年には北海道にも大滝わらしべ園を開園した。

夕方になると、枚方のわらしべ園の道場には近隣の子供に混じって、園生も柔道で機能回復の訓練を行っている。村井氏も夜の一般外来(外科・内科他)の診察前に、障害者へ声を掛けることを忘れない。

「私は、障害の子でもやれるような、例えば立てなかつたら寝技だけで競えるような柔道の大会があればいいなと思っているんです」

村井氏の夢はもう1つある。それは、障害児の療育指導をするコンダクターをもっと増やすことだ。そのために村井氏は今「コンダクター養成の大学を作りたい」と言う。

指導者をたくさん作ることでより多くの障害者を社会復帰に結びつけられるからだ。

最初は5人の障害児を受け入れてオープンしたわらしべ園は、その後、松本甫ダイコ口社長など柔道関係者らの共鳴も得て、現在は枚方と北海道に1万5千464平方mの敷地に2つの施設を持つ大きな組織となった。

「私は園児に国へ税金を払える身分になれって言ってるんです」と村井氏は言う。つまり、早く社会復帰す



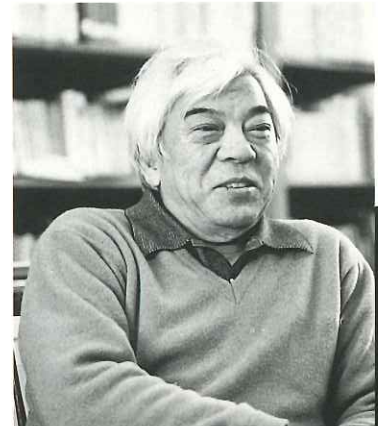
1985年、東海大の佐藤宣哉、山下泰裕氏がわらしべ園を訪問。大喜びの園児たち

るために頑張れということだろう。現在、村井氏は枚方氏と大滝村に隔週「行ったり来たり」という。

東大阪市で開業医として、裏で村井氏を支える陽子夫人の元へもろくに帰れない様子だ。

医師と組織者と柔道家としての人生を突っ走っている村井氏。若い頃の柔道の話になると若者のように表情が輝いたのが印象的だった。

村井氏は、柔道の利点を脳性マヒの治療に取り入れたが、その応用も見事だが、利用されている柔道も本望なのではあるまいか。



### PROFILE

むらい・まさなお——1926年10月10日、香川県高松市生まれ、66歳。父(真一氏)が韓国の光州市で柔道師範をしていたため、幼・少年時代は韓国に住む。43年光州東公立中学卒業後、光州医専へ入学。1年で退学し、軍人に。48年、米子医専(現鳥取大学医学部)へ入学。柔道を再び始める。50年、名古屋での国体に出場。51年米子医科大学を卒業。56年、大阪市立大医学部外科へ移る。78年にわらしべ園を開設する。88年には北海道有珠郡大滝村に大滝わらしべ園を開設し、重度身障者の更生援護の活動を行っている。家族は妻・陽子さん(62歳・医師)。娘さん3人は嫁いでいる。大滝わらしべ園理事・施設長、医学博士。柔道5段